

銀座湖山日記



～親をいれたい病院づくり

自分がはいりたい施設づくり

そして我が子、孫を入れたいと思う施設づくり～

【2月7日 KERT(カート)出動】

今朝は、カートが出動する。東京の保育園に。私も駆けつける。
 東京23区では、日々コロナが増えている。保育園幼稚園の園児から、家庭内感染。
 医療福祉のスタッフが、濃厚接触者となり、自宅待機となる。
 患者・利用者をお世話するスタッフが、足らなくなる。
 土曜日から、東京支援の連絡を関東地区幹部で取り合っている。
 コロナ発生施設に、電話で状況を確認している。
 嬉しいのは、皆明るく元気な声で答えてくれる事。
 全国の湖山の施設から、励ましの手紙や支援物資が届くからだ。
 湖山Gの職員と家族を守ることが、対コロナ戦略そのもの。
 今はまだ、国の戦略と、自治体の戦術がうまく噛み合っていない。
 行政の歯車が回らない。湖山Gは、独立艦隊から、連合艦隊となった。
 株式会社の施設にも、医療スタッフを投入する。
 コロナ対戦の経験から、湖山Gの強み、素晴らしさも、また、弱みも見えるようになった。
 現場のパラメディカルスタッフは、即、自主的に行動できるのだが、事務職の動きが鈍い。
 経営理事や法人本部の指示待ちになっている。
 後方事務になっているのだ。先頭指揮の経験がないのだ。
 3・11の経験は、一部の人間のみで風化しつつある。
 事務管理者を、現場で役に立つリーダーに育てるには、
 現場経験しかない。
 私の時と同じように。



対コロナ戦略特殊車両カート

【6月25日 湖山の使命は、生きる事】

最近の東欧の戦争の映像を見ると、心が痛む。病院や、学校が、ミサイルで破壊されている。
 子供や学生たちの映像が心に残る。
 平和に、普通に生きているというだけの事が、どれ程幸運でありがたい事か。
 保育園や、児童施設にメロンが届き、子供達が喜んでくれている写真を送って頂いた。
 今年のメロンは、特に甘い。この甘さを思いっきり味わって欲しい。

この子達が、大人になった頃の社会は、平和だろうか。

仮にそうでなくとも、とにかく、今は、幸せであって欲しい。

昨日は、新しい保育園の設計の会議があった。

夢の国のような外観。保育士が、働きやすい、動きやすい基本設計。視界や、導線の良さを配慮した。

これは、介護施設と同じだ。園児にとっても、保育士にとっても、明るく楽しく、そして安心安全。

湖山の施設は、老人ホームも、児童施設も皆同じ設計思想。

音楽ホールも、ダンスホールも、映画館も、池も、キャンプ場も、フィールドアスレチックも、そして、イチゴ農園もある。

生きる事の、全てがある。

そんな贅沢な夢のような人生の、社会へのスタートとなる保育園。

子供の夢を育むのが、老人の夢となる。これも、未来への介護。

老いて育む、未来への夢。老後も、私は楽しいぞ。

【7月1日 新たなモチーフは保育】

湖山Gには、院内保育所が2つ、認可保育所が2つ、学童保育が1つ、母子支援施設が2つある。

母子支援施設にも、幼児が大勢いる。母子支援施設にも、栄養士、保育士を配置するのが、次の構想だ。

実は、文化施設の、いきいきプラザにも保育士を配置したい。

乳児を抱える親にも、文化的な暮らしを支える、いきいきプラザにしたいからだ。

母子で通える、カルチャーセンター。スポーツセンター、映画館。レストランもありそうで足りない。

デイサービスの空き時間を、乳児を抱えた親の母子喫茶店に使えないだろうか。

新たな、湖山Gのモチーフは、保育だと考えている。

湖山Gのテーマは、職員の家族全部の幸せを体現する事。

自分の職場プラス、親を入れる医療介護施設。

そして、我が子を入れたいと思う、保育園幼稚園、子ども園。

湖山Gは、何時も未来へ向けて新たな経営テーマを掲げて来た。

医療と介護の統合。介護と暮らしの両立。医療と福祉の連携。

そして、保育と幼児教育の一体化。子ども園の理想を体現する。

介護福祉士と保育士の教育の統合から始める。

介護と保育の人材交流は、今迄なかったように思う。

お互いに、学ぶ事が多いのではないか。

湖山Gの新たなモチーフは、保育から幼児教育への進化。

保育は、人間としての生存から、人間としての成長へ導くまで進化進歩する。

それは、私達にも、新たな学びと成長をもたらす。

湖山の保育士も、進化成長する。

優秀な、心ある保育士にふさわしい、素晴らしい保育所たるべく、新たな設計を考えている。

私自身には、保育の経験はないが、自分自身が幼児だった、園児だった頃の記憶はある。

泰成君の時代に、心を戻す事は可能だ。泰成君のバックツォーザ・フューチャー。67歳の幼児は、暴れるぞ。

【7月2日 誰の心に寄り添うのか】

病院と保育園。

どちらの仕事にも共通している事は何か。

病院では、認知症の老人と、意思疎通が難しい。

患者さんの、気持ちは、態度行動でわかるのだが、こちらの都合や意向を理解してもらう事が難しい。

食事や、お風呂を、気分次第で、拒否される事もある。

無理強いしても、放っておいても、虐待と言われかねない。

赤ん坊は、とにかく泣いてくれる。

私の面倒を見て、お世話をするとばかりに。

でも、こちらの都合は、わかってくれない。

相手の都合に合わせるのが、医療介護保育。

選ぶのは、患者、園児の方で、こちらは、選ばれる方だ。

このお客様には、選ばれたくないなあと感じる時もあるが、ご指名は、天命。逃げる事とも断る事も出来ない。

認知症の親を持ったお子さん。難しい子供を持った親御さん。どちらも、天命。

私達は、その家族が、戦友。

神や天使との逃げられぬ運命の家族が、本当のお客様であり、戦友でもあると感じる時がある。

親は、仏にも厄の神にも見える。

子は、天使にも悪魔にも見える。

私たちが、心を寄り添う相手は、実は、その家族だったりする。

また、私達の苦勞と努力を理解してくれるのは、身近な利用者のご家族が1番。

保育園ならば、保護者、親御さんの心に寄り添って行かなければ、保護者が続かない。

私達は、昼当番。親は、夜当番。連携で、24時間、365日の児童の命と成長を支えている。

毎日、親と保育士は、相互に保育の引き継ぎをしている。

病院の看護師と同じだ。デイサービスに近いかな。

家庭と保育園とのチームケア。

保護者家族と保育園スタッフとのチームケアが必要だ。

【7月4日 キツザニア湖山】

キツザニアは、南米のブラジリアかどこかが発祥だったと思う。

日本で開業した時に、一度見学に行った。

子供自身しか中に入れない。

泰成君でも無理なのだ。

子供が、白衣を着て、医師でも看護師にでもなれる。

制服を着て、警察官にでも、消防士にでもなれる。

湖山の母子支援施設の子供達を連れて行ってあげたい。

大人になってからの、自分の姿に夢を持たせたい。

その支援も、湖山の使命。

母子の役目に、母子の就業支援がある。

小学校の時に見た、病院で飛び回る白衣の父の姿は、憧れにはならなかった。

あまりにも、過酷に映った。

子ども心にも。

母子支援施設の子供に、働く大人の姿を教えてあげたい。

自分の将来の姿だけではなく、今の自分を支える為に頑張る母親の姿も。

これから、東京では、病院・特養ホーム・保育園を一体で建て替える施設がある。

その施設では、キッザニアのように、児童に医療福祉の現場を体験できるような設計をしたい。

キッザニア湖山。

その新規企画に夢を託せるスタッフを育てたい。

集まれ、湖山の旗の下に。

【7月7日 保育とは】

昨日は、東京の保育園を訪問した。

丁度、毎年贈る鳥取からのメロンが届いており、園児が食べている時間だった。

毎年、丸ごとのメロンを抱えた園児の写真を貰っていたが、食している姿は、嬉しい。

その後は、タオルを掛けてもらってお昼寝。

私も、一緒にお昼寝をしたくなかったくらい、安らかで、幸せそうだった。

私にも、このように可愛い泰成君だった時代があったはずだ。

老い先と、終活を考える歳になればこそ、幼き赤ん坊幼児の姿に、心が洗われる。

職員幹部から、孫の話聞く事も多くなった。

羨ましくも、幸せのお裾分けを頂いたような気分になる。

人生を見送る立場から、見送られる立場になれば、残された若者の未来への責任を意識する。

経営者として。

医療から、高齢者介護、そして保育。

これから、介護施設・家族寮・保育園一体の事業を企画する。

保育とは、保護と教育の事ではないかと気がついた。

今日から、富士山の麓にスタッフ大勢と旅をする。

病院院内保育所を訪れるのも、楽しみ。

父が心の拠り所にしていて。

保育所を訪問する理事長役は、父からの贈り物だ。

富士山の姿も久しぶり。

過去と未来は繋がっている。過去と現在と未来は、一緒に存在する。

私の意識の中では。

父と共に。

【7月13日 日本工芸を支持する】

私の週末は、美術館か映画館巡り。

美術館は散歩風だし、映画館では、つまらない映画では居眠りをしている。

いくつも回るので、映画館美術館トライアスロンと呼んでいる。

都心ハイキングとも言える。

私は、機会があれば若いアーティストの支援の為に、初期の作品を購入する。

投資でもないし、趣味と言うほど入れ込んでいるわけでもない。

若手の支援。

アーティストの成長を、自分の人生と重ねて年輪、思い出として行く事が楽しいのだ。

特養ホームを、個人の作家しか展示しない、個人美術館としているのも、その考えによる。

数年毎に、その作家の作品を購入して、並べて展示するとその作家の作風の変化、成長を見る事が出来る。

自分の老を、若者の成長に置き換えていくのだ。

子供のいない人間の思考回路。

ご縁があり、元文化庁長官が代表の、日本工芸を支援する活動に参加している。

国立美術館の館長や、芸大学長といった方の集まり。

日本工芸旦那衆の会とも言う。

つまり、若手の作家の作品を購入するスポンサーになる活動をしている。

気をてらった作風より、自然で普段使いができそうな作品が好きだ。

普段使う食器に、高価な漆器、焼物は使わない。

高価なブランディグラスは、使っている間に皆割ってしまった。

やはり、本物でも、気張らずに普段使いできるものが身の丈に合っている。

日々手に触れて、飽きが来ない。

最近、施設竣工の記念品に、益子焼のカップを使っている。

施設職員に配るのだ。

来客にではない。

普通の普通の生活に、本物の食器を使う。

病院・施設では洗浄器を使うので割れてしまうので、残念だが、使っていない。

食器洗浄に美大学生のアルバイトを使い、施設使用ができないかとも考える。

工芸美術館に、介護施設を併設する。保育園園児にも、本物食器で食事を提供する。

これも、日本の文化、伝統。

そして、本物の食育に相応しい。

幼児教育と言うより、幼児の頃の生活を大事にしたい。

園児に余計な干渉はできないのだが、保育園の食育の一環としてなら許されるのではないか。

自分が、両親のお陰で、幸せだったので、最近の社会のありように違和感を感じる。

自分が理事長の保育園や母子施設だけでも、もう少し、なんとかならないものだろうか考える。

政治や、社会問題から逃げたいと思う塾居老人の個人的な思案である。